

永田 淳著  
『河野裕子』

(笠間書院)

著者は、河野裕子と永田和宏の長男。子息でなければ知りえないエピソード、歌の背景を知っている著者ならではの鑑賞が読める。例えば、癌の再発が分かっていたからの様子を次のように述べる。

癌の進行に伴う体の衰えで、出来ることは徐々に少なくなっていく。家事などにも思うに任せなくなってきた時期である。そんな不如意な状態であっても笑うことはできる。笑い声はあなたに残すことが出来る、そんな健気さ。

一方で、客観的に丁寧に歌を鑑賞している。感慨を多くは滲ませない、抑制の効いた文体で語る。オノマトペへの言及、感情語の使用などについて触れる。

何といふ顔してわれを見るものか私は  
こころ吊り橋ぢやない

以下は、この歌について述べたもの。頭でこねくり回して思い浮かんだのではない、身体が本能的に掴み取った言葉、それこそが河野短歌の魅力でもある。

五十首を抽出し読み解く。人物と作品の変遷が味わえる一冊だ。(柴田 佳美)

大口玲子歌集  
『ザベリオ』

(青磁社)

書名の「ザベリオ」は、フランシスコ・ザビエルの古い表記。大口は、人の死、戦争の愚かさ、自然の怖さ、そして人への愛、それらを全身で受け止め、「言葉」として表現している。時に厳しく、時に優しく、そして何よりも冷静に。

被爆直後の写真の浦上天主堂 モノク  
口の神のことは残れり

記憶は薄れていってしまう。しかし神の言葉は消えることはない。心のある限り。

東京に「ひめゆり展」来しかの夏のは  
れは少女より幼かりしか

何にでも摔るべき平兵衛<sup>ず</sup> わが罪に  
水に魚にビールに摔る

常に自らの原罪と向き合い、自らを律する姿勢が自然体で歌に表現される。

われをもつとも傷つけることができる  
のはわが息子 桃に指をぬらして

祈りや贖罪にも似た歌には、大口の愛を  
して平和への切実な思いが詰まっている。

宗教的な言葉やエピソードも多いが、ど  
れも人間の普遍的な真理に触れている。広

く読まれてほしいと思う。(伊藤 祐楓)

相原かる歌集  
『浜竹』

(青磁社)

逆光の奥から歩いてくる人に近づいて  
ゆく顔持つわれか

スーパリーの棚には並ぶ一夜干し それ  
その夜の遠ざかりつつ

至極シンプルな身の回りの出来事だって、相原かるの現代的なユーモア(時にブラックユーモア)のフィルターを通過せば、フレッシュな歌の題材になってしまう。独自の目線で作られた歌は、ともすればわかりにくいものになりがちだが、説明を最小限にとどめつつ短歌として成立させるバランス感覚が素晴らしい。読者は「あるある」と頷かされ、「確かに」と唸らされているうちに、現代日本を生きる三十〜四十代の男のリアルを追体験する。

特に、理屈を思い切って放り投げた作品は歌集の中でもひとしきり力強く魅力的だ。くつついた餃子と餃子をはがすとき皮が破れるほうの餃子だ

多摩川を渡るあいだは目をあげて多摩  
川を見る 多摩川だなあ

どこか不器用で悲しげで、でも愛らし  
い。そんな姿が目につかぶ。(松井 竜也)